

映画『日の名残り』におけるスティーブンスの心情の曖昧さの再現性
—ミス・ケントンとの関係性に着目して—

210096 久野 華子

序章

『日の名残り』は、1989年に出版されたカズオ・イシグロによる小説である。この作品は彼の第三作目の小説であり、同年に、イギリスで最も権威ある文学賞の一つであるブッカー賞を受賞している。さらに本作品は、小説が出版された4年後の1993年にジェームズ・アイヴォリー監督によって映画化されており、第66回アカデミー賞で8部門にノミネートされるなど、小説同様に映画も高い評価を受けている。文学界においては、『日の名残り』の登場人物であるスティーブンスの「信頼できない語り手」としての側面について、多くの研究がなされてきた。一方で、映画作品に関する先行研究は小説に比べて限定的である。英文学者の菅野（2024）は、アダプテーションとは「文学作品を原作とする映画やテレビドラマ」（p.160）であり、イシグロは自身の作品のアダプテーションに寛容な人物であったと指摘している。また、英文学者の阿部（2013）は、シェイクスピアの『ハムレット』を例に挙げ、「映画は文学を、あるいは文学は映画を、直接的・間接的に活性化させ、再生させる」（p.1）と論じている。こうした議論を踏まえつつも、『日の名残り』における映画作品がどのように原作小説の文学的特徴を再現しているのかという分析は、まだ十分に行われていないと言えるであろう。

そこで本稿では、小説『日の名残り』で用いられている信頼できない語り手という技法の映画における再現性を主題とする。この技法が小説において、主人公スティーブンスのミス・ケントンに対する恋愛感情の曖昧さを生み出す鍵であることを踏まえ、映画においても同様の解釈が可能であるかを検証する。本研究の目的は、小説の技法が映画においてどのように受容され、再現されているのかを明らかにすることである。また、ミス・ケントンとスティーブンスの恋愛関係に焦点を当て、小説と映画を比較してその関係性を論じることで、作品全体の理解を深めることを目指す。

研究手法としては、まず、信頼できない語りや小説の主題などについての先行研究をもとに小説の分析を行う。映画の分析では、先行研究に加え、役者のインタビューなどの映像資料も参考にする。そしてこれらの分析結果をもとに、小説の技法と映画の表現を比較してその対応関係を明らかにし、信頼できない語り手は映画でどのように再現されているのかを明らかにする。

ここで、「信頼できない語り手」について説明する。信頼できない語り手とは小説技巧の一種で、カズオ・イシグロ小説の代表的な特徴である。英文学者のロッジ（1997）は、信頼できない語り手を「つねに、みずから語るストーリーの一部を成す登場人物である」（p.221）と説明している。信頼できない語り手は、物語において自身も登場人物でありな

がら、ストーリーを進行させる語り手の役割を果たしているのである。『日の名残り』においては、スティーブンスが信頼できない語り手の役割を果たしている。そして、信頼できない語り手の語りには、曖昧性が伴う。イギリスの小説家である Swift(1989)のインタビューにて、カズオ・イシグロは、スティーブンスの語りは自己欺瞞の言語によって成り立っており、スティーブンスは自分の感情や記憶の危険な領域を察知し、それを避けるために意識的、または無意識的に語りを操っていると説明している。イシグロはまた、その結果として、記憶を都合よく歪めたり曖昧にしたりすることで自己欺瞞が助長され、痛みを伴う真実を受け入れられずに苦悩すると語っている (Swift, 1989)。つまり、スティーブンスは自分にとって都合の悪い事実を故意に、もしくは無自覚に隠蔽、捏造して語り自己欺瞞を繰り返すことで、苦悩や矛盾が浮き彫りになるのである。以上を踏まえて本稿では、信頼できない語り手を、「自分の認めたくない事実を意図的または無意識に隠蔽、歪曲して語る人物」と定義する。

第1章では、小説の分析を行う。スティーブンスとミス・ケントンの人物像、現在と過去が交互に描かれる構造の効果を明らかにする。そして、スティーブンスのミス・ケントンの互いに対する恋愛感情を、信頼できない語り手に留意しながら検証していく。第2章では、映画の分析を行う。映像で視覚的に得られる要素から、ミス・ケントン、スティーブンスの人物像を読み解く。現在と過去が繰り返される構造については、現実と回想の切り替えが、映像ではどのように表現されているのかを明らかにする。そして、スティーブンスとミス・ケントンの互いへの感情が読み取れる言動に着目して、二人の関係性を確認する。第3章では、第1章、第2章で分析した内容をもとに、小説と映画を比較する。ミス・ケントンに復職の意思の有無、ミス・ケントンが結婚を報告した日のスティーブンスの後悔、再会後のスティーブンスの感情に焦点を当て、映画でも小説と同様の解釈が可能であるかどうかを明らかにする。

第1章 小説『日の名残り』

本章では、小説『日の名残り』の分析を行う。まずは、スティーブンスの語りから読み取れる彼とミス・ケントンの人物像を確認する。次に、過去と現在が交互に描かれる小説の構造を分析しどのような効果があるのかを考察する。最後に、スティーブンスの語りに見られる心情の描写や、回想中の出来事などに着目して、お互いへの心情が表れている箇所から、双方に恋愛感情があったかどうかを明らかにする。

第1節 小説におけるスティーブンスとミス・ケントンの人物像

本節では、スティーブンスとミス・ケントンの人物像を明らかにする。主に、小説におけるスティーブンスの語りから読み取れる情報を基に、二人の性格が表れている箇所に着目して考察する。

はじめに、スティーブンスの人物像を分析していく。スティーブンスの職業は執事であるが、英文学者の新井（2017）は、「個人的な感情は一切表わさず、余計なことも言わずに主人に忠実に仕え、仕事にも有能だが、常に影の存在であり、自己主張をしない」（p.166）という特徴は、典型的な執事像であると指摘している。このことから、スティーブンスがどのような人物であるかは、彼個人としての人間性よりも、執事としての姿がその多くを占めていると考えられる。従って、彼の人物像を理解するためには、彼の執事としてのアイデンティティが重要になるであろう。

スティーブンスにとって、自身の理想とする執事であることが何よりも重要であり、彼の言動の根幹となっている。彼の考える偉大な執事とは「品格」のある執事であり、品格についてこう述べている。「品格の有無を決定するものは、みずからの職業的あり方を貫き、それに堪える能力だと言えるのではありますまいか」「偉大な執事が偉大であるゆえんは、みずからの職業的あり方に常住し、最後の最後までそこに踏みとどまれることでしょう。外部の出来事には——それがどれほど意外でも、恐ろしくても、腹立たしくても——動じません」

（p.61）。つまり、スティーブンスの考える品格とは、どのような状況下でも感情を抑え、執事としての役割を全うすることなのである。さらに彼は、その品格においてはイギリス人に勝る者はいないと考えており、「偉大な執事のイメージを思い浮かべようとするとき、その執事がどうしてもイギリス人になってしまうのは、至極当然のことだと申せましょう」

（p.62）と述べている。このように、スティーブンスにとって、品格あるイギリス人の執事こそが理想の執事であり、それは彼の生き方と深く結びついている。また、スティーブンスがこの偉大な執事の例として、自身の父ウィリアムをあげていることから、ウィリアムの存在は彼の執事としてのアイデンティティの形成に大きく影響していると言えるだろう。

スティーブンスの執事としての品格を追い求め感情を抑圧しようとする信念は、彼の行動に現れている。その一つとして、ユダヤ人の使用人を解雇する場面が挙げられる。ダーリントン卿はスティーブンスに、二人のユダヤ人の女中を解雇するようにという指示を出し、

スティーブンスは二人を解雇する。彼は後にこの件について「心にじつに重くのしかかる出来事」、「このお屋敷の中では絶対に起こってほしくないたぐいのこと」(p.215)であったと語る。本心では心苦しく思っているながらもそれを押し殺し、ダーリントン卿の言うままに従っていたのである。これは、ダーリントン卿がナチスに傾倒していく場面でも同様である。知人のカーディナル氏がスティーブンスに、ナチスはダーリントン卿を利用しようとしており、このままでは卿の立場が危ういと忠告しても、「私はご主人様のよき判断に全幅の信頼を寄せております」(p.325)と言ってダーリントン卿の判断に身を任せるのである。このようにスティーブンスは、執事と言う職業が自身のアイデンティティとなっているがゆえに、自身の感情を抑圧するのである。

さらに、彼の感情や本音を抑圧するという部分から、他者と向き合おうとしない一面を読み取ることができる。スティーブンスの父ウィリアムが亡くなる場面を例に挙げる。ウィリアムは亡くなる間際「わしはお前を誇りに思う。よい息子だ。お前にとって、わしがよい父親だったならいいが……。そうではなかったようだ」(p.140)と語り掛けるがスティーブンスは「父さん。いま、すごく忙しいのです。また、朝になったら話にきます」(p.140)と言って仕事に戻り、父親はそのまま亡くなってしまうのである。この場面について英文学者の岡村(1992)は、「仕事が、そして威厳という概念がいつも二人の間に立ちはだかっていて、私人として向き合えていなかったからだ」(p.27)と指摘している。しかし、ウィリアムは最期になってスティーブンスと、父と子関係として向き合おうとした。それにもかかわらず、スティーブンスは父親を拒んだのである。彼は執事としての品格を求め、自身の本心や感情を抑圧した結果、人と向き合い、人間関係を築くことを恐れていたといえよう。人との関係性を築くことに臆病という面では、精神的に未熟な人物であるといえるであろう。

次に、ミス・ケントンについて分析していく。スティーブンスの回想で語られる彼女の言動や会話からは、彼女は感情豊かで、自分の意見を持っており、思ったことをはっきりと述べる人物であることが読み取れる。岡村(1992)も、ミス・ケントンは問題を自分事として捉え、自分で決断を下し、その選択の結果を受け止められる人物であると評している。この人物像はユダヤ人の使用人を解雇するよう命じられたことを知った場面に表れている。彼女は怒りをあらわにして、ダーリントン卿の指示に従おうとするスティーブンスに強く抗議するのである。上述したスティーブンスの対応とは対照的に、主人の判断の言いなりになるのではなく、自分の良心に従って行動している。

さらにミス・ケントンは他者と積極的に関わりを持とうとする人物である。彼女のスティーブンスに対する発言をいくつか例に挙げる。「なぜ、なぜですか、ミスター・スティーブンス？なぜ、あなたはいつもそんなに取り澄ましていなければならないのです？」(p.216)、「と言いつつ、ほら、お顔にはまたばつの悪そうな笑いが浮かんでいますわ、ミスター・スティーブンス。それはなぜでしょう？」(p.220)、「何をお読みになっているのかしら、ミスター・スティーブンス？」(p.234)。このように、彼女のスティーブンスに対する発言から

は、スティーブンスに興味を持ち、積極的に関わろうとしていたことが読み取れるのである。そして、彼女が自身の結婚を報告した日も、婉曲的な表現ではあるが、「知り合いと私にとって、あなたはとても重要な人物だったのですよ？」(p.313)とスティーブンスを大切に思っていることを伝えるのである。このようにミス・ケントンは、人との私的な関係を拒もうとするスティーブンスとは対照的に、他者に興味を持ち、積極的に関わり、向き合おうとする人物である。

本節では、小説におけるスティーブンスとミス・ケントンの人物像を分析した。スティーブンスは執事としての品格を求める厳格さを持つ一方で、自分の感情や考えを抑圧し、私的な人間関係を築くことを拒む人物であることが明らかになった。それに対し、ミス・ケントンは自分の意思で判断し、感情表現が豊かで、人との関わりを大切にする人物であることが分かった。二人の人物像には対照的な部分があると言える。

第2節 小説の構造

本節では、小説『日の名残り』の特徴である過去と現在を交互に描く構造を分析し、どのような効果があるのかを明らかにする。この小説はスティーブンスの語りを軸に物語が進行する。プロローグ、一日目夜、二日目朝、二日目午後、三日目朝、三日目夜、四日目午後、六日目夜の八つの章から成っており、旅が進むのと同時に物語の時間も進行するが、その旅の中で彼は何度も過去のことを回想する。ここでは特にこの回想の場面に着目して分析を行う。

この構造の効果の一つとしてまず考えられるのは、回想に出てくる出来事がスティーブンスにとって重要なものであることを読者に印象付けるという点である。過去のスティーブンスの様子がただ描かれるのではなく、スティーブンスが旅をしている最中で、回想という形で彼の口から語られる。これにより、彼にとってその出来事は、時間が経っても思い起こされるような何か特別な出来事であることを読者に示唆するのである。過去の回想について、教育学者の堀(2021)は、高齢者にとって過去の出来事は決して等しい価値を持つものではなく、人生のターニングポイントとなったような出来事を中心に回想するものであると論じている。このことを鑑みると、スティーブンスにとってかつてのダーリントン・ホールでの日々が、これまでの人生において忘れることのできない瞬間であると考えられる。また、彼の回想中のダーリントン・ホールでの出来事のほとんどに、ダーリントン卿とミス・ケントンが登場しておりスティーブンスは二人について度々言及する。例えば、スティーブンスはダーリントン卿について「私は卿が心底善い方であった、骨の髄まで紳士であった、と公言してはばかりません。私の働き盛りの歳月をダーリントン卿へのご奉仕に費やせたことは、私の最も誇りとするところです」(p.85)と語っている。ミス・ケントンに関しては、毎晩ココアを飲みながら業務について雑談を交わすココア会議のことや、彼女が花をもって部屋に入ってきたときのこと、彼女の婚約のことなど様々に言及している。これらは、

彼にとって二人が非常に大きな存在であるということを示している。このように、現在の彼が、過去を繰り返し回想するという構造にして、二つの時間軸を作ることによって、回想される過去が重要な出来事であると読者に思わせる効果を持つのである。

さらに、スティーブンスが回想を繰り返し行う様子は、彼が過去に囚われていることを読者に思わせる。このように過去に囚われながら高齢期を歩むことを、アメリカの老年学者 McCullough(1993)は、“arrested aging”(p.189)と定義している。人は、素晴らしき過去に囚われており、高齢者のアイデンティティはそこから構築されるというのである。彼は、arrested aging の例としてカズオ・イシグロ作品の登場人物を挙げ、自身の執事としての栄誉ある過去がスティーブンスのアイデンティティを構成しており、彼はそれに囚われ続けていると論じている。実際、スティーブンスに限らず高齢者が自身の昔話をするというのは一般的なことである。高齢者が過去を回顧し、その思い出に囚われているという観点からも、老齢のスティーブンスが過去に執着しているということが読み取れる。

加えて、現在と過去が切り替わる場面からも、スティーブンスの過去に対する固執が見受けられる。彼は、回想から現実に戻るとき、「どうやら、昔の思い出ばかりを語ってしまいました」(p.94)、「どうやら、少し昔の思い出にふけりすぎたようです」(p.225)、「どうやら、思い出にわれを忘れ」(p.255) などというように、回想に夢中になっていたことを示すような表現を多用している。また、スティーブンスも「ここソールズベリーまでの昨日の旅にしましても、ごく最初のところで丘の中腹に止まったことを申し上げただけで、他のことは何もお話ししておりません」(p.94)、と自身が回想に没頭していたことを認めている。実際この小説の半分以上は回想の場面である。このように、スティーブンスが回想を繰り返し、現在よりも過去に比重を置く構造は、スティーブンスが過去に囚われていることを示していると言えるであろう。

最後に、スティーブンスの過去の回想は旅の中で行われているという点に着目する。人文社会学者の谷田(1992)は、スティーブンスの旅には、「執事であるというアイデンティティを揺り動かし、その結果彼に自分を見つめ直す機会を与えるという積極的な役割」(p.40)があると論じている。前節でスティーブンスは執事としての品格に囚われている人物であることを示したが、旅の最中彼は、執事というアイデンティティを構成する一部ともいえるダーリントン・ホールと執事としての屋敷での職務から、一時的に解放されているのである。また、スティーブンスは旅の最中で村人に、「品格ってのは、紳士だけのものじゃない...誰もが努力して、身につけられるものだ...ここでは意見を言うのに遠慮はしないんです」(p.265)と言われる。この村人の言う品格は、スティーブンスの考える品格と全く一致しておらず、このように旅を通じて屋敷の外の人間と関わることで、スティーブンスが信じてきた品格、執事というものが揺るがされていることが分かる。さらに谷田(1992)は、スティーブンスの旅は「空間的移動とともに時間的移動をも伴うもの」(p.40)であるとしている。彼が指摘するように、スティーブンスは旅を通じて、イギリスの田園風景の中を空間的

に移動しながら、現在の旅と過去の回想という時間的な移動をしている。ダーリントン・ホールに着目して空間と時間の移動を見てみると、スティーブンスは過去の回想の舞台であるダーリントン・ホールから空間的に離れ、時間的には近づいているのである。この空間と時間の移動は、スティーブンスが過去の自分を俯瞰していることを示唆しているのではないだろうか。これは、スティーブンスが自身の過去と距離を取りながらも過去と向き合う、つまり過去の自分自身を見つめ直す時間として旅が機能していると言えるのである。

さらにこの空間的移動と時間的移動ということに関して、英文学者の平井（2011）は、スティーブンスの旅は、ミス・ケントンが住む「コーンウォールへの地理的な（ジオグラフィカル）旅」（p.94）であると同時に、「過去への時間的な（クロノロジカル）旅」（p.94）であると論じている。スティーブンスはミス・ケントンのもとへと向かいながら、過去の彼女との出来事を繰り返し回想する。前の段落で過去の思い出の一部であるダーリントン・ホールから空間的に離れ時間的には近づいていることを指摘したが、平井が指摘するように、ミス・ケントンのもとへは空間的にも時間的にも近づいている。彼は、この旅を通じて、ミス・ケントンに関する記憶と向き合うことを余儀なくされているといえるであろう。

本節では、現在と過去が交互に語られる構造に着目し、それがどのような効果をもたらすのかを分析した。現在のスティーブンスが過去を度々回想することで、その出来事が彼にとって重要な出来事であるということ、彼が過去に囚われていることを示す効果があること、旅は彼が過去の自分と向き合う時間になっていることの三点が明らかになった。

第3節 小説におけるスティーブンスとミス・ケントンの関係性

本節では、スティーブンスとミス・ケントンの互いへの感情に着目して、二人の関係性について分析する。特に、小説の特徴である信頼できない語り方に留意してスティーブンスとミス・ケントンの互いへの感情が読み取れる箇所に着目して、二人の関係性を明らかにする。

まず、スティーブンスの今回の旅のきっかけに焦点を当てる。冒頭でスティーブンスは、旅に乗り気になったきっかけはミス・ケントンからの手紙であると明かす。しかし、それと同時に、「ただ、誤解なきように願いたいのは、私はミス・ケントンの手紙で職業意識を刺激された、ということなのです」（p.12）と、あくまで仕事上の理由でミス・ケントンに会いに行くことをわざわざ語る。自分の個人的な感情ではないことを強調するこの彼の語りは、人文社会学者の金山（2022）による、スティーブンスが語りに用いる強調的な表現が彼の主張の根拠の空虚さを示しているという指摘に当てはまる。仕事の一環で旅に行くことを強調すればするほど、その裏にミス・ケントンと会いたいという私的な感情があることが読者に伝わるのである。また、スティーブンスはこの旅に際して、スーツを新調したり、ミス・ケントンの暮らす地方の写真を見返したりするのだが、これらの行動は彼がミス・ケントンに会うことを楽しみにしていることを示唆しているといえよう。

次はこの旅のきっかけとなったミス・ケントンからの手紙に着目する。スティーブンスは

彼女からの手紙に、ダーリントン・ホールへ復帰したいという願いを感じ取り、次のように語る。「その長い、抑えた調子の文章の合間に、間違いなくダーリントン・ホールへの郷愁がにじみ、もどりたいという願望——だと私は確信しております——」(p.18)、「考えれば考えるほど、明らかであるように思えてまいりました。このお屋敷に大きな愛情をもち、今日では捜そうにも捜せない模範的な職業意識をもつミス・ケントンこそ、ダーリントン・ホールの職務計画を完璧にしてくれる人物ではありませんまいか」(p.19)。しかしこれらの発言にも、強調的な表現が多用されており、発言の根拠の希薄さが読み取れる。また、「思えてまいりました」(p.19)という表現は、スティーブンスの主観が反映されていることは明らかである。

そして、ミス・ケントンがダーリントン・ホールへ復帰したがっているというスティーブンスの確信は、次第に揺らいでゆく。二日目の朝には、「たしかに、手紙のどこにも「もどりたい」の五文字は書いてありません、が、ダーリントン・ホールの日々への深い郷愁は文章の随所で感じられ、全体のニュアンスから伝わってくるメッセージは間違いようがありません」(p.66)と語っており、彼女の復帰を確信している。しかし、三日目の朝にはその確信は崩れ、「ミス・ケントンの手紙の...どこを捜しても、昔の地位に戻りたいという意味が具体的に書かれていないことは覚えておかねばなりますまい。もしかしたら、...ミス・ケントンがそのように望んでいると勝手に解釈しているだけなのかもしれません」(p.200)、「昨夜、ミス・ケントンの手紙を読み直しながら、私はこの手紙のどこから復帰の願いを感じ取ったのかを捜そうとし、それをなかなか見つけることができないのに驚いたほどでしたから」(p.200)と語る。このようにスティーブンスの確信が揺らいでいくことによって、手紙の文面から伝わってきたというミス・ケントンの復職の意思は、彼の願望が反映された思い込みに過ぎないということが徐々に明らかになる。その結果、スティーブンスがミス・ケントンの復帰を強く望んでいることが伝わりと同時に、彼の語りには信憑性がないことが読者に示される。

続いて、回想にてスティーブンスがミス・ケントンについて語る場面を分析する。まず、ミス・ケントンが殺風景なスティーブンスの部屋に花を持ってくる場面に着目したい。この時、スティーブンスは彼女が部屋に入ってきた瞬間「あつけにとられた」(p.71)と語っており、彼のプライベートな空間に突然入ってくる人物は、ミス・ケントンだけであったことがうかがえる。また、殺風景な空間に花を持ってくるという行為は、スティーブンスの仕事中心の生活にミス・ケントンが変化をもたらすことを暗に示していると言えるのではないだろうか。

次に、スティーブンスの父ウィリアムが亡くなる場面に着目する。ウィリアムが危篤となった際、仕事に戻ろうとするスティーブンスを、ミス・ケントンは「いまいらっしゃらないと、後で深く後悔することになりますわ」(p.150)と引き留める。しかし最終的に、「いま行けば、父の期待を裏切ることになると思います」(p.155)と言って仕事を選んだスティー

ブンスに対して彼女は、「もちろんですわ、ミスター・スティーブンス」(p.155) とその決断を受け入れる。この場面は、ミス・ケントンが執事としての職務を最優先するスティーブンスの価値観を理解し、それを尊重したことを示している。また、父親の死という彼のプライベートな問題にミス・ケントンが深く関わっていることから、二人の心理的な距離が縮まっていたことも読み取れる。

さらに、ミス・ケントンが仕事を教えていた女中のライザも、二人の関係性を読み解く上で重要な役割を果たしている。ミス・ケントンは、スティーブンスがライザを雇うのを渋ったのは彼女が美人だったからだと言い、「可愛い娘を召使に加えたがらない。なぜでしょう?...ひょっとしたら、われらのミスター・スティーブンスもやはり生身の人間で、自分完全には信頼できないということですかしら？」(p.220) とからかう。ミス・ケントンのこの発言は、単なる冗談ではなく、スティーブンスのことを異性として意識し、女性に対する考えを表に出そうとしない彼の本音や感情を引き出そうとしていると考えられる。この場面を境に、同僚という枠を超えて二人の間に男女の関係性が示唆されるようになったと思われる。また、ライザが結婚して屋敷を去る際、ミス・ケントンは「いずれ捨てられるに決まっているのに、なんて愚かな.....」(p.224) と語るのだが、このような結婚に対する悲観的な考え方は、自身のスティーブンスとの恋愛が上手くいっていないことが大きく影響していると言えるだろう。

続いて、ミス・ケントンがスティーブンスの部屋に入ってきて、彼が読んでいた恋愛小説を取り上げる場面に着目する。スティーブンスはこの時のことを、「二人を取り巻く空気が微妙に変化しました。...二人の周囲が突然静まり返ったのです」(p.236) と説明している。そして、スティーブンスは彼女を部屋から追い出すのだが、二人の関係が「とうてい適切とは呼べないものになった」(p.240) ことに気づき、職業上の関係に修復することを決意したと語る。この時のスティーブンスは、ミス・ケントンに恋愛小説を読んでいたことを知られたことを恥じていたと考えられる。これには、執事は恋愛をするべきではないという彼の信念が表れており、彼が執事として守ってきた品格が崩れるような一面をミス・ケントンに知られたことを恥じていることが読み取れる。彼は、恋愛という執事の品格を揺るがすような問題にミス・ケントンが踏み込んできたことに動揺し、品格が失われることを恐れて、彼女と一線を引いたのであろう。

ここで、この出来事の数日後にミス・ケントンがした発言に着目する。彼女はスティーブンスに対し、「あなたはご自分に満足しきっておられるのでしょうか。...あと、この世で何をお望みかしら。わたしには想像ができませんわ」(p.245)と語る。この発言からは、ミス・ケントンのスティーブンスとの恋愛に対する諦めが読み取れる。ライザのことでスティーブンスをからかったときの発言と比較しても、ミス・ケントンの弱気な気持ちが表れていると言えるであろう。

続いて、ミス・ケントンが結婚報告をした日の場面に注目する。この場面で重要なのは、

スティーブンスがミス・ケントンの叔母の訃報を受けた日と、彼女から結婚報告を受けた日を混同して記憶している点である。ミステリー作家の Wall(1994)は、この記憶のすり替えをスティーブンスの自己防衛であると指摘している。三日目の朝、スティーブンスはミス・ケントンが叔母の訃報を受けた日のことを回想し、彼女が部屋の中で泣いているかもしれないと思うと、部屋に入れなかったと語る。しかし、四日目の午後にも再び同じようにミス・ケントンの部屋の前に立ち尽くしていた記憶を思い出し、こう語る。「この裏廊下での一瞬と、そのとき胸中に沸き起こっていた名状しがたい感情の渦のことは、私の脳裏にしっかりと刻み込まれ、いつまで経っても消えることはありません」(pp.303-304)。しかし、記憶に強く残っているとする一方で、スティーブンスはなぜそこに立っていたのかは思い出せず、この出来事は叔母の訃報があった数か月後のことかもしれないと語り、彼の記憶が曖昧であることが示唆される。そして、廊下の前で立ち尽くしていた日は、叔母の訃報を受けた日ではなく結婚報告の日の出来事であることが次第に明らかになる。このように、スティーブンスの語りは記憶に強く刻まれた出来事の曖昧さと混乱を示しており、信憑性に欠ける面がある。Wall の指摘を踏まえると、スティーブンスはミス・ケントンとの向き合いを避けたことへの後悔を抑圧するため、叔母の訃報と結婚報告をすり替えて記憶し、自分を守っていたと解釈できる。さらに、彼がこの出来事を曖昧である一方で強く記憶していたことは、この日の出来事が彼の心にずっと引っかかっていたことを示しており、彼が後悔していたことを表していると言えるであろう。

続いて、2人が再会するシーンについて読み解いていく。スティーブンスはミス・ケントンの表情に悲しみを見出し、手紙に書いてあった空虚な人生のことに言及するが、彼女はそのようなことを書いていないと語る。そして、別れ際、結婚生活について尋ねるスティーブンスに彼女は、「あなたといっしょの人生を、——考えたりする」(p.343)が、後悔がありつつも今自分は幸せであることに感謝していると答え、スティーブンスはこの答えを聞いた瞬間「張り裂けんばかりに」(p.343)心が痛んだと語る。この場面で、スティーブンスが手紙から読み取ったミス・ケントンのダーリントン・ホールへの復帰の意思は彼の願望が反映された思い込みであることがはっきりと示される。同時に彼は、自分が人生において誤った選択をしたこと、つまりミス・ケントンとの恋愛に向き合わなかった自分の過ちを自覚するのである。

最後に、終盤のウェイマスでの場面を分析する。スティーブンスはウェイマスにて、ミス・ケントンと再会した日のことを回想している際、見知らぬ老人に話しかけられ、会話の途中で涙を流す。そしてその理由はダーリントン卿であると語る。しかし、スティーブンスが話しかけられた時に回想していたことは、ミス・ケントンと再会した日のことであり、彼の思考と言葉は一致していない。スティーブンスが本心を隠蔽する人物であることを考慮すると、彼が涙を流した本当の理由はダーリントン卿ではなく、ミス・ケントンのことであると言えるのではないか。また、スティーブンスはウェイマスでの回想中で、ミス・ケントンが

別れ際に涙を流していたことを思い返す。しかし、ミス・ケントンが自分の意思で判断し、自分の選択に責任を持つことができる人物であることを踏まえると、彼女は夫との結婚生活に満足しており、スティーブンスへの未練からではなく、昔の同僚と再会し、当時を懐かしく思って涙を流したと考えられる。スティーブンスとミス・ケントンの涙の理由には違いがあるといえるであろう。

さらにこの場面の老人の「夕方が一日で一番いい時間だって言うよ」(p.351)という発言からもスティーブンスのミス・ケントンに対する後悔を読み取ることができる。まず、夕方が一番いい時間という言葉に込められた意味を考える。この「夕方」は物語のタイトルである「日の名残り」とつながりがあると考えられる。この旅を通じて彼が自分自身の人生を振り返ってきたことを考慮すると、この一日とはスティーブンスの人生を指しており、夕方とは彼の現在の年齢を表していると言えるのではないか。この「いい時間」とは単に良いという意味ではなく、良い記憶も悪い記憶も含め、人生を振り返り自分を見つめ直すという行為そのものに意味があるということであり、これは彼が今回の旅を通じて行ってきたことである。これらを踏まえると、「夕方」という「いい時間」に「ミス・ケントンとの再会の日」を回想していたスティーブンスが涙を流しているということは、彼の人生において彼女が大きな存在であったことを示していると言えるであろう。

加えて、スティーブンスは老人に「私は選ばずに、信じたのです。...自分の意思で過ちをおかしたとさえ言えません」(p.350)と語る。だがこの発言も自分を正当化するためであると考えることができる。スティーブンスは言っているが、彼は人生において、自分の意思で選択しないことを選び、彼の意味で過ちを犯したと言えるであろう。このように小説では、ミス・ケントンへの想いを封じてきたこと、その選択をしてしまったことを後悔しながらも、彼は最後まで本音を表には出そうとしないことが明らかになった。

本節では、ミス・ケントンとスティーブンスの関係性について、互いへの感情が読み取れる場面に着目して分析を行った。スティーブンスの語りからは、本心とのずれが読み取れ、彼がミス・ケントンに対して恋愛感情を抱いていながらもそれを隠そうとしていること、自身の決断を後悔していることが明らかになった。また、ミス・ケントンがスティーブンスに対して恋愛感情を抱いていたことを確認した。

本章では、小説と映画を比較するにあたって、まずは小説の分析を行った。人物像の考察では、スティーブンスが執事としての品格を追い求め感情を抑制する性格であること、ミス・ケントンは対照的に感情を露わにし、自分の意思で決断する人物であることが明らかになった。小説の構造分析では、現在の旅と過去の回想が交互に語られる構造が、スティーブンスが過去へ固執していること、回想の出来事が彼にとって重要なものであると示していることが分かった。そして二人の関係性については、彼の本心を隠そうとする語りから、彼がミス・ケントンへ恋愛感情を抱きながらもそれを抑圧し続けてきたことが読み取れた。一方でミス・ケントンは、スティーブンスとは異なり自分の選択に責任を持ち、スティーブン

スへの恋愛感情は過去のものとなっていたと論じた。

第2章 映画『日の名残り』の分析

前章では、小説『日の名残り』におけるスティーブンスとミス・ケントンの人物像、現在の旅と過去の回想を交互に描く構造の持つ効果、二人の関係性を明らかにした。本節では、小説と映画の比較材料を得るために、前章と同様の観点から映画の分析を行う。主に、映像技法などの視覚的要素に着目する。まずはスティーブンスとミス・ケントンの人物像を分析する。次に、映画では現在の旅と過去の回想の繰り返しがどのように表現されているのか、どのような効果をもたらしているのかを明らかにする。最後に、スティーブンスとミス・ケントンの関係性を考察する。

第1節 映画におけるスティーブンスとミス・ケントンの人物像

本節では、スティーブンスとミス・ケントンの人物像を分析し、映画では二人の人物像はどのように描かれているのかを確認する。スティーブンスを演じたのは、イギリス出身の俳優アンソニー・ホプキンス、ミス・ケントン役は、同じくイギリスの俳優エマ・トンプソンである。二人の人物像を分析するにあたって、役者のインタビューも参考にする。

最初にスティーブンスの人物像から分析する。小説と同様に、スティーブンスの職業である執事が、彼のアイデンティティの大部分を構成している。しかし、小説とは異なり、彼が自身の理想の執事像について語る場面はあまり見られないが、スティーブンスの周囲の人物が彼の人物像を語っている。ダーリントン・ホールで働く使用人はスティーブンスのように「執事になって“さん”付けで呼ばれ暖炉のそばで葉巻をくゆらす」(0:17:35) ことが目標だと述べる。また、ミス・ケントンは「彼は仕事に自分を捧げてる」(1:36:04) と語っている。これらの発言からは、スティーブンスが執事という仕事に心身を捧げ、そんな自分を誇りに思っていることが読み取れる。また、スティーブンス自身も「この屋敷のもとで歴史が作られるのだ...皆それに誇りをもって...」(0:34:18) と語っている。さらに、優秀な執事 conditions を「品格があるかないかだ」(0:17:48) と語る父親に同意する場面や、父親の老いによる仕事のミスを認めようとしない様子などからは、彼が父親のことを尊敬しており、彼の理想の執事像には父親が大きく影響していると言えるであろう。このように映画では、小説のようにスティーブンス本人が多くを語ることはなくとも、彼の周りにいる人々の言葉によって、彼が執事である自身に誇りを持ち、品格を求める人物であったことが表現されている。

また、小説で描かれている感情や本心を表に出さず抑え込もうとするスティーブンスの性格は、映画でも効果的に表現されている。ダーリントン卿からユダヤ人の女中を解雇するよう指示を受ける場面や、ミス・ケントンから結婚を告げられる場面、知り合いからダーリントン卿のナチス介入を忠告される場面などが例に挙げられる。スティーブンスは言葉では、指示を受け入れたり、相手の発言を気にしていないかのような受け答えをしたりしている。しかし、その表情は硬く、何かを考えこむようにじっと動作を止めて相手の話を聞いている。また彼は会話の最中に、しばしば相手から目を逸らす。このように、言葉に表情やし

ぐさが伴っていない様子が、スティーブンスが内面を抑圧していることを表現しているといえよう。アンソニー・ホプキンスの演技を通じて、彼の動作から、スティーブンスの胸の内には多くの感情が秘められていることが伝わってくるのである。

さらに、アンソニー・ホプキンスは、ハリウッドに関連するエンターテインメント情報を提供する YouTube チャンネルである **Screen Slam** が 2015 年に公開したインタビューで、映画『日の名残り』におけるスティーブンスの人物像について言及している。彼は、スティーブンスを、プロフェッショナルな執事で、厳格でユーモアのセンスはないが、いい人であると評する一方で、彼は仕事に全てを捧げるあまり、愛を逃してしまった人物であると語っている。ホプキンスが語ったスティーブンスの人物像は、筆者が分析したスティーブンスの人物像と小説、映画の両者において概ね一致している。このことから、映画におけるスティーブンスの人物像は、小説で描かれた人物像をもとに忠実に再現されているといえるであろう。

次に、ミス・ケントンの人物像を分析する。小説の分析ではスティーブンスの語りから、彼女の人物像を明らかにしたが、映画ではエマ・トンプソンの演技をもとに人物像を確認する。まずは、小説同様に、感情表現豊かで、自分の意思で判断し、考えを相手にはっきりと伝えられる人物像が読み取れる。小説ではスティーブンスの語りによって表されていたが、映画ではエマ・トンプソンの演技によって表現されている。ミス・ケントンは作中で、笑顔、怒った顔、困惑した顔、悲しんで涙を流す顔など、様々な表情を見せる。また、自分の意思に基づいて判断し、考えを言葉ではっきりと相手に伝えている。ユダヤ人の解雇に反対してスティーブンスと口論する場面、父ウィリアムのミスを手助けする場面、スティーブンスに結婚を伝える場面などが例に挙げられる。また映像では、これらの場面におけるミス・ケントンの感情表現が視覚的に伝わるため、感情や本心を抑圧するスティーブンスとの対照性がより強調されると考えられる。

さらに、映画においても小説と同様に、スティーブンスの部屋に花を持っていく場面や彼をからかう場面から、彼女が積極的に人との関わりを持とうとする人物であることが読み取れる。しかし、映画評論家の **Wygant** が、2021 年に自身の YouTube チャンネルである **The Bobbie Wygant Archive** にて公開したインタビュー動画で、ミス・ケントンを演じたエマ・トンプソンは、彼女は孤独な人物であるとも語っている。彼女が指摘するように、ミス・ケントンの孤独は映画の中から読み取ることができる。映画では、ミス・ケントンがベンと出かける夜の場面が描かれている。ベンに、一緒に宿を始めようと誘われた彼女は最初「わからないわ 考えたこともない仮定の話ですもの ベンさん」(1:37:51)とはぐらかし、ベンが本気であると伝えてもはっきりと返事をする様子はない。それにもかかわらず、彼女はベンのキスを拒むことなく、結局は結婚を受け入れるのである。スティーブンスからの愛に飢えていたミス・ケントンは孤独を埋めるためにベンからの好意を受け入れたと捉えることができるであろう。また、ミス・ケントンがひいきにして教育していた女中が、彼女の

陰口を言う場面が映画では付け加えられている。結局この女中は結婚して屋敷を去ってしまう。このように、ミス・ケントンは人との関係を大切にしていたがその裏には、孤独の中で愛を求めていたという一面があることを映画では読み取ることができる。

本節では、映画におけるスティーブンスとミス・ケントンの人物像について分析を行った。スティーブンスの人物像については、執事としての品格を求め感情や本心を抑圧するという人物像は小説と同様であるが、映画ではスティーブンス本人の言動に加え、周囲の人物の発言が彼の人物像を表現していることを確認した。ミス・ケントンに関しては、小説と同様に感情や考えを率直に伝え、人との関わりを大切にす人物であり、映像で描かれることでスティーブンスとの対比がよりはっきりと伝わることを明らかにした。また、映画では小説にはない場面が加えられており、ミス・ケントンの孤独な一面が読み取れることを示した。

第2節 映画の構造

第1章第2節にて、小説『日の名残り』では、現在の旅と過去の回想を交互に描く構造は、回想の内容が彼にとって重要な出来事であること、彼が過去に固執していること、回想を通じて過去の自分と向き合っていることを読者に示唆する効果があることを確認した。これを踏まえ本節では、映画においてはスティーブンスの現在の旅と過去の回想がどのように描かれているのか、この構造にはどのような効果があるのかを分析する。

小説では過去の出来事は回想として語られるが、映画に関して英文学者の坂口（2012）は「映画では、見えるものは否認しようがないし、映っているものは否定しようもない。…スクリーン上の事物は、『示し』の上で等価なのである」（p.28）と指摘している。しかし本稿では、映画においても、現在の旅と過去の回想の二つは同等ではなく、過去の回想は単なる過去の描写と言い切ることはできないと捉える。これを検証するため、主に現在から過去が切り替わる場面を取り上げて分析し、その根拠を以下に示していく。

まず、現在の映像と過去の映像が入り混じって映し出されている場面を例に挙げて分析する。冒頭にてミス・ケントンの手紙が彼女の声で読み上げられ、その手紙の内容に合わせて、現在のダーリントン・ホールとスティーブンス、そして当時のダーリントン・ホールが重なって映し出される場面が二回登場する。一つ目の場面では、「あの頃のように大勢のスタッフも——」（0:04:01）という手紙の文と共に、当時の屋敷の使用人たちが広間に映っているが、スティーブンスが表れると薄くなって消えてしまう。二つ目の場面では、ミス・ケントンの近況が手紙で語られた直後、スティーブンスが台所と廊下の境にある扉の小窓を覗くと、ミス・ケントンがこちらに向かって歩いてくるが、彼女も徐々に薄くなって消えてしまう。この二つの場面では、現在のスティーブンスと、過去の出来事が共存している。映画監督のアリホン（1980）は、このように一つの映像に二つの映像を同時に映して時間を行き来させる手法である「ディゾルヴ」（p.718）について、この移行の時間が長くゆっくりしたものであるほど、視聴者の郷愁を誘う効果があると説明している。この場面にはディゾル

ヴが用いられていることを考慮すると、ただの過去の描写ではなく、ミス・ケントンからの手紙を読んだスティーブンスが、当時の日々を回想している場面であると捉えることができるだろう。

次に手紙に着目して考察する。映画には、手紙の内容が語られている映像から過去の映像へと切り替わる場面が四つある。そのうちの二つは上述した冒頭の場面である。三つ目はスティーブンスが旅へと出かける場面である。スティーブンスが書いたミス・ケントンへの返事の手紙の内容が、彼の声で「私は最初の日を覚えています...あなたは突然予告もなくやって来た」(0:09:12)と語られる。そしてこの手紙の文と共に、ミス・ケントンが初めてダーリントン・ホールへ来た日の様子が映し出される。四つ目はスティーブンスがミス・ケントンからの二通目の手紙を受け取った場面である。彼が車の中で手紙を開くと、彼女の声で手紙の内容が語られ、「当時働いていた者で今も連絡があるのはあなただけ...時が流れたのですから仕方ありません」(1:01:10)という言葉と共に過去の様子が流れ始めるのである。このように、スティーブンスが手紙を読むことがきっかけとなり過去の映像が映し出されている場面は、ミス・ケントンの手紙を読んだ彼が過去を回想していると捉えることができるであろう。したがって、これらの場面は過去の事実の描写ではなく、彼の記憶の中の過去であると解釈することができる。

さらに手紙だけでなく、スティーブンスが乗っている車も過去の映像を分析するうえで欠かせない要素となっている。過去の映像が映し出される前後に彼が車を運転している様子が描かれている場面が度々登場する。英文学者の三村(2022)は、イシグロの作品に度々登場する乗り物に焦点を当て、「移動による場所の変化に伴う様々な想起は、語り手の叙述に過去が頻繁に挿入されるイシグロ作品の構造において重要な装置^{デバイス}となっている」(p.178)と指摘している。この解釈に従えば、スティーブンスの車に乗って移動するという行為は、彼に過去を想起させる役割を果たしており、過去の場面の前後に映し出される車を運転する映像は、彼が運転中に過去を振り返っていることを示唆していると言えるであろう。

続いて、過去の映像と現在の映像のつながりに着目して考察する。まず、宿泊先の酒場の場面を例に挙げる。スティーブンスが部屋で椅子に座りじっと宙を見つめる場面がフェードアウトし、当時のダーリントン・ホールにて政治問題への言及を求められて、執事の立場では意見を申し上げることはできないと断る映像に切り替わる。この直前に、酒場の人々と第二次世界大戦の話になった場面で、彼はナチスの手先となったダーリントン卿のもとで働いていたことを隠している様子が映し出されている。そして回想の後の場面でスティーブンスは、車で送ってくれた男性に対して「私自身も私なりに過ちを犯したのです」(1:23:07)と発言している。そして再び過去の映像に切り替わるのだが、その内容はユダヤ人の解雇に関する内容である。これらは全て第二次世界大戦やナチスに関連する内容である。こういった内容のつながりは、ミス・ケントンの結婚報告の回想の場面でも同様である。ミス・ケントンが結婚を伝えた日の様子が映し出されるのは、彼女と再会する場面の直

前である。このような、回想中の場面とその前後に映し出される現在の内容の関連性は、現在の出来事からスティーブンスが過去を連想したもの、つまり彼の回想であることを示唆していると捉えることができるのではないだろうか。

最後に、スティーブンスの登場しない場面について考察する。これは、スティーブンスの視点で語られる小説では存在しえない場面である。スティーブンスとの再会の直前、ミス・ケントンが夫のベンから孫が生まれることを告げられ、夫のことをやはり大切に思っているように見受けられる場面为例に挙げる。ここまで過去の映像がスティーブンスの記憶に基づく回想であると論じてきたが、この場面は彼が知り得ることのない情報であるため辻褄が合わなくなってしまう。しかし逆に、彼の回想ではない事実が存在することが、その他の過去の場面がスティーブンスの記憶によるものであるということを強調していると捉えることはできないだろうか。彼が過去に知り得なかった事実を映し出すことによって、スティーブンスの登場する回想の場面は、彼の主観によるものであるということを強調しているのである。

本節では、映画におけるスティーブンスの現在の旅と過去の回想がどのように描かれているのか、その描写がどのような効果を生んでいるのかを分析した。ディゾルヴやフェードアウトなどの手法、手紙や車などのモチーフ、過去と現在の映像の繋がりなどに着目して、映画においても、過去の場面が単なる過去の事実の描写ではなく、スティーブンスの記憶や彼の心情に基づいた回想として機能していることを示した。

第3節 映画におけるスティーブンスとミス・ケントンの関係性

本節では、映画から読み取れるスティーブンスとミス・ケントンの関係性について分析する。ミス・ケントンとスティーブンスがお互いに宛てた手紙、回想中の二人のやり取り、旅の最後に再会する場面に焦点を当てて分析を行う。これらは、二人の感情や考えが描写されているものであり、二人の関係性を明らかにするうえで重要と考えられる。

最初に、ミス・ケントンとスティーブンスの手紙に焦点を当てる。映画でも小説と同様に、ミス・ケントンからの手紙がスティーブンスの旅のきっかけとなっており、旅の最中にしばしばスティーブンスが手紙を開く様子が描写されている。手紙には「自分を何かに役立てたいと願うこの頃です」(0:05:15)と綴られており、再びミス・ケントンがダーリントン・ホールで働くことを夢見てスティーブンスは旅に出るのである。この手紙の内容の真偽は次章で分析する。また、映画では、スティーブンスもミス・ケントンに手紙を送っており、その手紙には、「私は最初の日を覚えています...あなたは突然予告もなくやってきた」(0:09:12)と書かれている。他者との関わりを持とうとしないスティーブンスが、初めて会った日のことを記憶しているということは、ミス・ケントンが彼にとって特別な人物であることを示唆しているといえるであろう。

次に、ミス・ケントンがスティーブンスの部屋に花を持ってきた場面に着目する。この場

面は小説でも見られるが、映画では、花を摘みに向かうミス・ケントンをスティーブンスが窓からじっと見つめる描写が加えられている。これは、彼女が一方的に関心を寄せていたのではなく、スティーブンスも彼女に興味を抱いていたことを示唆するための描写ではないかと考えられる。なお、映画中でスティーブンスがミス・ケントンの様子を窓からじっと見つめる描写はこの場面以外でもしばしば見られ、どれもスティーブンスが内心では彼女のことを気にかけていることが効果的に示されている。

スティーブンスの父ウィリアムに関する場面も、二人の関係性を示している。ウィリアムが中庭でお盆を運ぶ練習をしている様子をミス・ケントンとスティーブンスが二人で屋敷から見つめていた日のことは小説でもスティーブンスが言及していたが、映像だとより印象的に映っている。スティーブンスの隣にミス・ケントンが寄り添う様子は、父親の老いというプライベートな問題に介入する彼女の心理的距離の近さを視覚的に表現していると捉えることができる。

続いて、新しく入った女中のリジーに関連する場面に着目する。映画では、リジーとその恋人のチャーリーがミス・ケントンについて、「[結婚のことを] わかってもらえないわ... 年寄りの 30 女ですもの... そのわりにはせっせと誰かに花を摘んでいるよ」(1:27:41) ([] 内筆者) という会話をする場面が加えられている。先に示したスティーブンスの映っていない場面は事実が映し出されているという仮説に従うと、これはスティーブンスの回想ではなく、実際に交わされた会話であると考えられる。この会話からは、ミス・ケントンがスティーブンスへ恋愛感情を抱いていること、アプローチしているものの、上手くいっていないことが示唆されている。さらに、お金よりも愛を選び、同僚と結婚して屋敷を去った若くて美人なリジーと、お金やキャリアを差し置いて結婚を選ぶほどの若さはなく、同僚であるスティーブンスへの想いが実らないミス・ケントンという対比によって、ミス・ケントンの恋愛が上手くいっていないことが強調されているといえるであろう。また映画評論家の Meyers(20203)は、ミス・ケントンはキャリアを捨てて結婚するべきではないとリジーに忠告しながらも、自身はそれを都合よく無視して結婚したと論じている。ミス・ケントンはリジーの結婚に反対していたが、結果的にはリジーの結婚はミス・ケントンがベンとの結婚に踏み切るきっかけとなったといえよう。

さらに、ミス・ケントンがスティーブンスのいる部屋に入り、彼が読んでいる恋愛小説を取り上げる場面も二人の関係性において重要な役割を果たしている。文芸評論家の Chatman(2009)は、ホプキンスの演技によって、スティーブンスが痛いところを突かれたときに見せる弱さが、小説の語りでは描けない強烈さをもって映画では表現されていると論じ、この場面を例に挙げている。この時のスティーブンスは、微動だにしないが、目は泳ぎ、緊張した表情をしている。小説では毅然とした態度でミス・ケントンを部屋から追い出したとスティーブンスは語っていたが、映像では、ミス・ケントンに迫られて動揺する彼の心情が明確に映し出されている。この場で主導権を握っていたのはミス・ケントンであり、

彼女からの明らかな好意を感じて、執事としての品格が揺らぐことに怖気づき拒絶したステューブンスの様子が、彼の内面的な弱さを視聴者に印象付けている。

次は、ミス・ケントンのベンとの結婚に関連する場面に着目する。小説に比べると映画では、ベンはより存在感のある登場人物として描かれている。ベンはステューブンスとは対照的な人物である。映画では二人がダーリントン・ホールで談笑する場面が加えられているのだが、来客のナチスに関する会話に対して倫理的ではないと指摘するベンに対し、ステューブンスは私には関係ないと言いきる。さらに、ミス・ケントンがベンに求婚された日の夜のことも映画では描かれているが、彼は好意をストレートに伝えて求婚する。このように、ベンは仕事よりも自分の感情や生活を優先して考えをはっきりと伝えることのできる人物であり、ステューブンスとは真逆である。

続いて、ミス・ケントンがベンとの結婚を報告した日の場面を見てみよう。小説ではステューブンスの内面の機微は彼の語りで表現されていたが、映画ではホプキンスの演技から読み取ることができる。彼女の話を書くステューブンスは返事もろくにせず宙を見つめるだけで、最後に少し微笑む。結婚の報告に呆然として言葉を失い、そのショックを隠そうとする防衛反応で笑顔を浮かべたと推察される。また、この場面でもステューブンスはミス・ケントンと目を合わせようとしない。これは、彼が感情や本心を抑えているときにしばしば見せる特徴である。その後も彼の表情はずっと硬く、時折じっと動作を止めて考え込んでいるような表情を見せ、ワインボトルを落として割ってしまう。このワインを落とす描写は小説にはなく、ステューブンスの動揺している内面を行動で示すために加えられたと考えられる。さらに同じ日に開催されていた、ダーリントン卿がナチスに加担することになる国際会議も重要な役割を果たしている。ミス・ケントンとステューブンスが結婚のことを話す合間で会議が進行する様子が映し出されることによって、主人であるダーリントン卿と同様に、ステューブンス自身もミス・ケントンとの恋愛という自分の人生における選択の場面で誤った道へ進んでいることが暗示されていると言えるであろう。

最後に、ステューブンスとミス・ケントンが再会した日の場面を分析する。ステューブンスとの再会後ミス・ケントンは、孫が生まれるためダーリントン・ホールへの復帰は叶わなくなったことを彼に伝える。この時のステューブンスは祝いの言葉も言わずに、ただ相槌をうつだけで、放心状態であるかのような表情をしている。この様子から、彼がミス・ケントンの復帰を強く望んでいたことが伝わる。そして、店を出た後栈橋を歩きながら、ミス・ケントンは当時ダーリントン・ホールを去ったのはステューブンスを困らせたかったからであると告げる。この時も彼はずっとどこか上の空のような顔をして歩いている。そして、結婚生活は不幸なこともあったが、「ある日夫を愛している事に気付いた」(1:03:41)とミス・ケントンが言った瞬間、栈橋で流れている陽気な音楽が一層大きくなる。この場面では、友人や恋人、家族と共に過ごしている人々の中で、自分の本心と向き合うことを恐れて人との関わりを築いてこなかったステューブンスだけが唯一、人間的な繋がりをもたずに老齢を

迎えていることが、周囲との対比によって強調されている。ミス・ケントンは盛り上がる周囲の人々の様子を見て、「夕暮れが一日で一番いい時期だと言いますわ...みんな楽しみに待つと...あなたは何が楽しみ？」(2:04:55)と尋ねるが、スティーブンスは仕事であると答える。この時のスティーブンスの表情は、ぼんやりとして目の焦点が合わず呆然としており、結婚、孫の誕生とライフステージを進むミス・ケントンに対して、自分には仕事しか残っていないことをスティーブンスがはっきりと自覚し後悔の中にあることが読み取れる。

本節では映画の重要な場面を取り上げスティーブンスとミス・ケントンの関係性が読み取れる箇所について考察した。その結果、小説と同様に、手紙や回想中の出来事、再会の場面から、スティーブンスとミス・ケントンの間には恋愛感情があったことを明らかにした。また、映画では小説にはない場面がいくつか加えられており、視覚的にスティーブンスやミス・ケントンの内面が表現されている。

本章では、スティーブンスとミス・ケントンの人物像、過去と現在の描写、二人の関係性の三点に着目して映画の分析を行った。二人の人物像に関しては、スティーブンスは抑圧的で執事の仕事を最優先する人物であること、ミス・ケントンは感情表現豊かで意思をはっきりと伝える人物であることが明らかになった。過去と現在の描写においては、小説と同様に映像でも、過去がスティーブンスの記憶に基づく回想であると捉えられることを示した。そして、二人の関係性については、互いに特別な感情を抱きながらも、スティーブンスが本音を閉ざしていた結果、その関係は発展することなく、彼の人生において大きな過ちとなったことを明らかにした。

第3章 小説と映画の比較

第1章で小説、第2章で映画をそれぞれ分析し、スティーブンスとミス・ケントンの人物像や過去と現在を交差させる構造の効果、二人の感情を確認した。これを踏まえ本章では、小説での信頼できない語りによって描かれていたスティーブンスの心情が映画でも再現されているかを検証する。まず、映画でのミス・ケントンの復帰の意思がスティーブンスの思い込みである可能性に焦点を当てる。次に、彼女の結婚報告に対するスティーブンスの後悔と自己正当化が映画でも表されているかを考察する。最後に再会の場面において、スティーブンスがミス・ケントンのことを強く後悔しているにもかかわらず、それを認めようとしないう点が映画でどう表現されているかを分析する。

第1節 ミス・ケントンのダーリントン・ホールへの復帰の意思について

本節では、第1章の小説の分析で明らかにしたミス・ケントンのダーリントン・ホールへの復帰の意思はスティーブンスの願望が反映されたものであり、彼の思い込みに過ぎないということが、映画でも表されているか否かを検証する。

映画において手紙の内容は、スティーブンスが手紙を読む様子が映し出される背景で彼女の声によって語られるのだが、ここでは、このミス・ケントンの声に着目して彼女の復帰の意思を分析する。先に示した手紙が回想のきっかけになるという点を考慮すると、作中で手紙の内容を語るミス・ケントンの声は、当時を思い返しているスティーブンスの記憶の中の彼女の声であると捉えることができるのではないだろうか。さらに、ミス・ケントンからの手紙に書かれている文字は映像で映し出されることはなく、実際に何が書かれていたかは視聴者には明かされない。

さらに、スティーブンスはミス・ケントンとの再会の直前に再度手紙を読み直すが、この場面からもミス・ケントンの復帰の意思がスティーブンスの思い込みであったことを示唆するような描写がみられる。映画の冒頭で手紙の内容が語られる時、「自分を何かに役立てたいと願うこの頃です」(0:05:16)と、ミス・ケントンに復職の意思があることが示されているが、再会前に読み返す場面では、この内容が語られる直前にミス・ケントンが現れ、スティーブンスは手紙を片付けてしまう。小説では再会の直前にスティーブンスが手紙を読んでいたという描写はない。映画におけるこの演出には、スティーブンスのミス・ケントンの復帰を確信する気持ちが失われていることを暗に示す効果があると考えられる。上述したように、小説ではミス・ケントンが復職したがつているというスティーブンスの確信が、旅が進むにつれて揺らいでいくという描写があるが、映画では彼の確信に揺らぎが生じたことを、手紙の内容を語らないことによって表現しているのである。

また、再会の直前の場面で、ミス・ケントンが夫のベンに結局は愛情を抱いていることが伝わる様子が映し出される。前章で映画においてスティーブンスが知り得ることのできない事実が描かれることで、彼の回想の信憑性のなさが生まれる点を指摘したが、この場面も

これに当てはまる。ミス・ケントンと夫の仲が悪く、彼女は仕事に復帰したがっているというのはスティーブンスの独りよがりな思い込みであり、実際には彼の知らないところで、ミス・ケントンは夫との結婚生活を送り、孫もでき、過去ではなく現在を見つめて生きている。上に示したことから、映画においてもミス・ケントンの復帰の意思はスティーブンスの願望が反映されたものであり、実際に手紙に書かれていたかどうかは定かではないと解釈することができるであろう。

次に、この再会の場面が回想か否かという観点から考察する。小説では再会の場面が回想として語られていたと説明したが、映画では、一見すると再会の場面は回想ではなく現在の出来事として映し出されているように見える。しかし、見方を変えると映画でも再会の場面はスティーブンスの回想であると捉えることができるのではないだろうか。その鍵となるのは車の運転である。前章で、映画でスティーブンスが過去を回想する場面の前後で、そのほとんどの場合に彼が車を運転する様子が映し出されることを指摘し、車を運転するという行為は、彼が過去の出来事や自分を省みていることを示唆していると論じたが、スティーブンスがミス・ケントンと再会する場面の前後でも同様に、彼が車に乗る様子が映し出される。つまり、再会の場面が回想であるという解釈ができるのである。このことを考慮すると、再会の場面でのミス・ケントンの孫の件がなければ復帰するつもりであったという発言はスティーブンスの記憶の中の願望が反映されたものであるという可能性がでてくる。

また、ヨーロッパ文学者の井口（2021）は映画において、ミス・ケントンの復帰というスティーブンスの願望が、「映画では実現したものとして描かれる」（p.11）一方で、言葉ではスティーブンスとの結婚への未練をはっきりと明言しないという矛盾を指摘し、彼女が復帰の意思があったことを語る場面は「実際に起きた出来事に、スティーブンスの「願望」が反映された妄想の映像化」（p.13）であったと論じている。たしかに井口が指摘するように、ミス・ケントンはスティーブンスと再会し「それで私ももう一度[ダーリントン・ホールへ] お勤めをと」（2:02:33）（[] 内筆者）と語っており、彼女には復帰の意思があったものとして描かれているのに対し、スティーブンスとの別れ際に彼への未練は示唆されていない。しかし井口は、「妄想の現実化」（p.13）という表現に留めており、回想であったという可能性は指摘していない。そこで前段落で論じた、再会の場面がスティーブンスの回想であるという解釈を加えることによって、ミス・ケントンに復帰の意思がなかったことに、より説得力が増すのではないだろうか。映画内における回想の場面が、スティーブンスの記憶に基づくものであることは本論を通して論じてきた。したがって、再会の場面もスティーブンスの回想であると捉えることで、「それで私ももう一度お勤めをと」（2:02:33）という言葉は、彼の願望が反映されたものであり、記憶の捏造が行われていたという解釈の妥当性がより高まるのではないだろうか。そのため、ミス・ケントンは別れ際にスティーブンスへの未練を示さなかったのである。以上のことから、再会の場面は現在の出来事ではなく、実際にはミス・ケントンと別れた後のスティーブンスが自らの願望を反映して再構成した回想

と捉えることができるといえよう。

本節では、小説の分析内容を踏まえて映画の演出を再考し、小説において描かれていたミス・ケントンの復帰はスティーブンスの願望に過ぎないということが映画でも表現されているかどうかを検証した。手紙を読み上げるミス・ケントンの声はスティーブンスの記憶の中の声であること、再会の場面は彼の回想であることを指摘し、ミス・ケントンの復帰の意思はスティーブンスの思い込みであるということが、映画においても解釈できることを示した。

第2節 ミス・ケントンの結婚報告の日のスティーブンスの心情について

本節では、第1章と第2章での小説と映画の分析をもとに、小説で表されていたミス・ケントンが結婚を報告した日のスティーブンスの心情の抑圧や後悔が、映画でも表現されているかを検証する。

小説では、ミス・ケントンの叔母の訃報と結婚報告の日をスティーブンスが混同して記憶し、後悔を隠していたことを示した。一方映画では、小説とは異なりミス・ケントンが叔母の訃報を受ける場面は登場せず、結婚報告を受けたスティーブンスが泣いている彼女の部屋へ入り仕事の話をする場面がありのまに映し出される。ではどのように、彼の動揺や後悔が表現されているのだろうか。まずは、前述したスティーブンスがワインボトルを落とす場面が加えられているという点があげられるであろう。普段は仕事でミスをしないうスティーブンスがワインを落とすという描写は、彼内面の動揺を表していると考えられる。

続いて、スティーブンスがミス・ケントンの部屋に入った場面の画面の構図に着目して分析する。彼がミス・ケントンの部屋に入って小言を言い、退出するまでの間、スティーブンスは背中の一部が映るだけで、ミス・ケントンの泣いている顔が大きく映し出されている。そして回想が終わり、スティーブンスが車を運転している場面に切り替わる。したがって視聴者には、スティーブンスがこの時どのような表情をしていたのかを読み取ることはできないのである。この背中だけを映す構図は、スティーブンスが本心を隠していることを表していると言えるだろう。また、映画における過去の場面はスティーブンスの記憶に基づいた回想であることを踏まえると、この場面でスティーブンスの表情が映らず、感情が表現されていないのは、彼にとってこの時の感情が思い出したくない記憶であるからだと解釈できる。スティーブンスは、回想の中で彼女を引き留めなかったことを後悔していると表現していたように、映画でもスティーブンスにとって重要な出来事であったことが示されている。この場面はスティーブンスがミス・ケントンと再会する直前に映し出されている。また、過去の場面は彼の回想であることから、彼がミス・ケントンとの再会に際して、最も印象に残っている記憶であることを示唆しているといえるであろう。

本節では、ミス・ケントンの結婚報告の場面に着目して、小説で読み取れたミス・ケントンが結婚を報告した日のスティーブンスの心情の抑圧や後悔が映画でも描かれているかど

うかを検証した。その結果、場面の追加や画面の構図など、視覚的な要素によって、映像においても、スティーブンスの動揺や感情の抑制が再現されていることを明らかにした。

第3節 再会の場面でのスティーブンスの心情について

本節では、スティーブンスとミス・ケントンが再会する場面及び再会後の場面について、小説と映画を比較する。そして、小説で語られていたスティーブンスの心理状態が映画で再現されているのかを検証する。再会した二人の心情については、先に示した小説と映画の分析結果も踏まえて考察する。

小説の分析では、スティーブンスが最後まで、ミス・ケントンへの後悔を人に明かさずに胸に留めていたことを示した。映画においても、再会の場面及びその後の場面でスティーブンスが後悔を言葉には出さず隠していることが読み取れるかどうかを検証する。映画において彼が本心を隠しているということを裏付けるためにはまず、これらの場面が彼の記憶に基づいたものであることを示す必要があるが、これについては、本章の第1節で再会の場面の前後に車の運転があることから彼の回想であると解釈できる可能性を示した。ここでは、再会後に車に乗り込むスティーブンスの様子に着目する。映画でスティーブンスはミス・ケントンがバスに乗るのを見送った後、大雨が降る中で車に乗りこみエンジンをかける。そして車のフロントライトがアップで映し出され再会の場面は終わる。彼がミス・ケントンと別れ車に乗り込んでからエンジンをかけるまでは数秒間しかない。しかし車が回想の鍵であると考え、その数秒間の描写はスティーブンスが車の中で彼女と再会したときのことを思い返していることを示唆しているのではないだろうか。つまり、小説と同様に映画においても二人が再会したときの映像は彼の記憶に基づいた回想が映し出されていると言えるであろう。従って、再会の場面は事実の描写ではなく、スティーブンスの記憶の表出であると考えることができる。

さらに、スティーブンスが車に乗り込んでからライトが映し出されるまでの数秒の間に、フロントガラスは打ち付ける雨でぼやけ、スティーブンスの顔はすぐに不明瞭になってしまう。顔、つまり感情が表れる部分が不明瞭になるという構図は、彼が自分の内面をはっきりと明かそうとしないということを表している。そして、フロントライトがアップになりスティーブンスの表情が見えない構図も、前節で示したものと同様に、彼が内面を隠していることを表している。自分が人生において選択を誤ったことを自覚したスティーブンスが、どのような顔をしていたか、本心では何を考えていたのかは視聴者には定かにならないのである。このように、顔をぼやかしたり隠したりする表現は、スティーブンスが感情を隠し、後悔と向き合おうとしていないことを示唆しているといえよう。

最後に、小説で見知らぬ老人がスティーブンスに言った「夕方が一日で一番いい時間だって言うよ」(p.350)という発言は、映画ではどのような役割を果たしているのかを確認する。小説の分析で、「夕方」とは、一日をスティーブンスの人生と捉えた時の彼の年齢を指してい

ること、「いい時間」とは、スティーブンスが自分の人生を省みてきた今回の旅に意味があるということを指していることを確認した。これを踏まえて映画におけるこの発言の役割を確認する。小説とは異なり、映画ではこのセリフをミス・ケントンが言っている(2:04:53)。この違いにはどんな意図があるのだろうか。自分の人生を振り返る時間に意味があるというセリフを、老人ではなくミス・ケントンに言わせることで、スティーブンスにとって彼女との出来事を振り返ることがいかに重要な意味をもっているのか、つまり彼の人生において彼女がいかに大きな存在であるかということを示唆していると考えられる。また、先ほどこの場面が彼の回想であることを示したが、このことを鑑みると、彼はミス・ケントンに言われた「夕暮れが一日で一番いい時間だと言いますわ」(2:04:54)という言葉車をの中で思い返しているということになり、彼の後悔の深さを伺い知ることができる。このように、映画においても、小説と同様にスティーブンスが人生を振り返り後悔しているのはミス・ケントンのことであり、彼がそれを隠そうとしていると言える。

本節では、スティーブンスとミス・ケントンが再会する場面及びその後の場面に着目し、小説の分析で示した彼が最も後悔していることはミス・ケントンのことでありながらもそれを隠し続けていたということが、映画からも読み取ることができるかどうかを検証した。その結果、映画において再会の場面はスティーブンスの記憶に基づいた回想であること、彼が人生においてミス・ケントンと向き合わなかったことを最も後悔していること、そしてそれを決して認めようとせずに抑圧していることが明らかになった。

本章では、第1章と第2章の小説と映画の分析を踏まえ、『日の名残り』の小説においてスティーブンスの信頼できない語りによって示される以下の三点が映画からも読み取ることができるかどうかを検証した。まず、ミス・ケントンの復職の意思がスティーブンスの思い込みである点について、映画での手紙の内容は彼の記憶の中のミス・ケントンの声で語られていること、再会の場面が回想であることを指摘し、小説と同様に彼の願望が表れたものであることを示した。次に、ミス・ケントンが結婚を伝える場面に関しては、スティーブンスの彼の顔が映し出されない構図によって、彼が彼女を引き留めなかった後悔を抑圧し自分を正当化していることが表現されていることを明らかにした。最後に、スティーブンスがミス・ケントンのことを最も後悔していながらもそれを認めようとしない点については、彼の顔がぼかされたり隠されたりすることで、彼の本心がはっきりとしないことや後悔を表に出さず胸の内に秘めていることを示した。また、夕方が一番いいときであるというセリフは人生を振り返る時間を指しており、ミス・ケントンが言うことによってスティーブンスの人生において彼女が大きな存在であることを示唆していると論じた。

終章

イギリスの小説家カズオ・イシグロによって執筆された『日の名残り』は、小説、映画共に高い評価を受け、広く親しまれている作品である。文学界においては、この小説の特徴の一つである主人公スティーブンスの信頼できない語りに関する研究が数多く行われてきた。しかしその一方で、映画についての研究はあまり見られず、小説同様に高く評価されている映画において、小説で評価を受けているスティーブンスによる信頼できない語りや映画ではどのように描かれているのかが十分に検討されているとは言えないであろう。そこで本稿では、小説『日の名残り』において用いられているスティーブンスの信頼できない語りの再現性を主題とした。この技法が小説において、スティーブンスのミス・ケントンに対する感情の曖昧さ、抑圧を表現していることを踏まえ、映画においてはどのように表現されているのかを分析し、小説の技法が映画においてどのように再現されているのかを明らかにすることを目標とした。

研究手法としては、文献、映像資料などの先行研究をもとに、スティーブンスとミス・ケントンの関係性に着目して小説と映画の分析をそれぞれ行った。これらの分析をもとに両者を比較し、小説において信頼できない語りを用いて語られるスティーブンスの心理状態が映画からも解釈できるかどうかを検証した。

第1章では、小説の分析を行った。まず、スティーブンスとミス・ケントンの人物像をそれぞれ分析し、前者は理想の執事像を追い求め、感情や考えを表に出さず人と向き合うことに臆病な人物、後者は自分の意思で物事を選択し、感情表現豊かな人物であり、二人の性格は対照的であることを明らかにした。次に、この小説の特徴の一つである現在の旅と過去の回想が交互に語られる構造がもつ効果を分析した。スティーブンスが回想を繰り返す構造は、その出来事が彼の人生において重要なものであること、彼が過去に執着していることを示唆していると論じた。最後に、小説においてスティーブンスとミス・ケントンの互いに対する感情が読み取れる場面に着目して二人の関係性を分析した。主にミス・ケントンからの手紙、回想中の出来事、再会の場面などに焦点を当て、スティーブンスとミス・ケントンの間には曖昧ながらも互いに恋愛感情があったことを示した。

第2章では、映画の分析を行った小説の分析と同様に、まずはスティーブンスとミス・ケントンの人物像を分析した。役者のインタビューや二人の演技などをもとに人物像を読み取り、表現方法は異なっているが、小説で描かれていた二人の人物像が映画でも再現されていることを確認した。次に、小説に特徴的な現在の旅と過去の回想を交互に描く構造が映画ではどのように表現されているのかを分析した。映画において車の運転が回想を示すサインとなっていること、ディルゾウなどの映像技法や手紙の語り、音楽などの視覚的・聴覚的な工夫がなされていることを明らかにした。そして映画では過去の映像は回想ではなく現在と等価のものであるという先行研究に対して、映画でも過去の場面がスティーブンスの記憶に基づく回想であると解釈できることを指摘した。最後に、これらの分析を踏まえて、

映画において二人の互いへの感情が読み取れる場面を分析し、役者の演技や、映像の構図、音楽などの視覚的、聴覚的要素に加え、小説のストーリーがアレンジされている箇所を指摘し、互いの間に恋愛感情があったことを示した。

第3章では、第1章、第2章の小説と映画の分析内容を基に、小説でスティーブンスの語りによって描かれていた以下の三点が映画でも描かれているかどうかを分析した。一点目はミス・ケントンのダーリントン・ホールへの復帰の意思がスティーブンスの思い込みであったこと、二点目は彼ミス・ケントンが結婚を報告した日に引き止めなかったことを後悔しながらも自分を正当化していること、三点目は、彼の人生における最大の後悔はミス・ケントンと向き合おうとせず、彼女との人生を自らの選択によって手放してしまったことを後悔しながらも最後まで明かそうとしないという点である。過去の場面が回想であることを踏まえて分析した結果、一点目については、手紙を読み上げるミス・ケントンの声はスティーブンスの記憶の中の声であり、手紙の内容には彼の願望が反映されていることを示した。二点目については、スティーブンスの表情が見えない画面構図やストーリーのアレンジなどの工夫によってスティーブンスの後悔の抑圧や動揺が表されていると論じた。三点目に関しては、台詞を言う人物がミス・ケントンに置き換わっていること、再会の場面は回想として描かれていることから、スティーブンスが最も後悔していることはミス・ケントンであることが示唆されていると示した。以上のことから、小説で描かれているこれら三点は映画でも同様の解釈ができることを示した。

このように本稿では、小説と映画を比較し、小説で描かれているスティーブンスのミス・ケントンに関する記憶や感情の隠蔽、捏造が、映画ではどのように表現されているのかを分析してきた。そして、車や手紙といったモチーフや場面構成から、映画の過去の場面はスティーブンスの回想であると解釈できる点、また手紙の内容を語るミス・ケントンの声がスティーブンスの記憶に基づき、彼の願望を反映している点を指摘した。さらに、結婚報告に動揺し引き留めなかった後悔や、彼の最大の過ちがミス・ケントンとの関係に向き合わなかったことであるという内面の隠蔽が映像技法によって表現されていることを示した。以上のことから、小説でスティーブンスの信頼できない語りによって生み出されるミス・ケントンにまつわる感情や記憶の隠蔽や歪みは、映画でも表現できると結論付けた。本稿の意義は、先行研究の少ない映画の分析を行い、小説の技法である信頼できない語りが生み出す、語り手の本心の隠蔽や事実の捏造などの効果が、映画においても表現できるという見解を示したことである。

参考文献

- 阿部曜子「文学再生装置としての映画 その1—カズオ・イシグロの場合—」『四国大学紀要』39号, 2013, pp. 1-10.
- 新井潤美「『日の名残り』と執事という語り手（特集 カズオ・イシグロの世界）」『ユリイカ』49巻, 21号, 2017, pp. 158-168.
- アリホン, ダニエル『映画の文法—実作品にみる撮影と編集の技法』岩本憲児, 出口丈人訳, 紀伊國屋書店, 1980.
- 井口祐介「カズオ・イシグロ『日の名残り』における不確かな供述 — 文学とその映画化の比較分析」『Rhodus – Zeitschrift für Germanistik』28号, 筑波ドイツ文学会, 2021, pp. 1-15.
- イシグロ, カズオ『日の名残り』土屋政雄訳, ハヤカワ epi 文庫, 2001.
- 岡村久子「Kazuo Ishiguro: The Remains of the Day—Stevens が語らないこと」『甲南女子大学英文学研究』28号, 1992, pp. 25-39.
- 金山愛子「『日の名残り』における語り手のレトリックと情景描写」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』20号, 2022, pp. 39-55.
- 坂口明德「消された泣き顔：映画『日の名残り』考」『大妻女子大学英文学会』45号, 2012, pp. 27-35.
- 菅野素子「アダプテーションが広げるイシグロワールド—アウト・オブ・ジョイントによる『日の名残り』の舞台化をめぐる—」『カズオ・イシグロを求めて』武富利亜編, 長崎文献社, 2024, pp. 160-183.
- 平井杏子『カズオ・イシグロ：境界のない世界』水声社, 2011.
- 堀薫夫「カズオ・イシグロの作品における, arrested aging と unreliable narrator の問題」『大阪教育大学紀要. 総合教育科学』69巻, 2021年, pp. 217-226.
- 三村尚央『カズオ・イシグロを読む』水声社, 2022.
- 谷田恵司「老執事の旅—カズオ・イシグロの『日の名残り』」『東京家政大学研究紀要1』32巻, 1992, pp. 37-44.
- ロッジ, デイヴィッド『小説の技巧』柴田元幸, 斎藤兆史訳, 白水社, 1997.
- Chatman, Seymour. “The Art of Film Adaptation: The Remains of The Day.” *Narratives of Indian Cinema*, edited by Jain, Manju., Primus Books, 2009, pp.195-209.
- McCullough, Laurence B. “Arrested Aging: The Power of the Past to Make Us Aged and Old.” *Voices and Visions of Ageing: Toward a Critical Gerontology*, edited by Thomas R. Cole et al., Springer Publishing, 1993, pp.184-204.
- Meyers, Jeffrey. “Ruined Lives in *The Remains of the Day*.” *The Article*, 20 Aug. 2023, www.thearticle.com/ruined-lives-in-the-remains-of-the-day (最終閲覧日: 2025

年1月8日)

Swift, Graham. “Kazuo Ishiguro.” *BOMB Magazine*, 1 Oct. 1989,
<https://bombmagazine.org/articles/1989/10/01/kazuo-ishiguro/> (最終閲覧日 :

2024年12月16日)

Wall, Kathleen. “The Remains of the Day and Its Challenges to Theories of Unreliable Narration.” *The Journal of Narrative Technique*, vol. 24, no. 1, 1994, pp. 18-42.

『日の名残り (字幕版)』監督 ジェームズ・アイヴォリー, Columbia Pictures, 1993.

Amazon Prime Video,

www.amazon.co.jp/gp/video/detail/B00EWDPUK/ref=atv_dp_share_cu_r (最終閲覧日 : 2024年12月16日)

ScreenSlam. “Remains of the Day: Anthony Hopkins Exclusive Interview | ScreenSlam.” *YouTube*, uploaded by ScreenSlam, 5 Mar. 2015,

https://youtu.be/Hmz7ERL_J68?si=NLzqWDL9ePLDUz9n

(最終閲覧日 : 2024年12月16日)

Wygant, Bobbie. “Emma Thompson “The Remains Of The Day” 1993 - Bobbie Wygant Archive.” *YouTube*, uploaded by The Bobbie Wygant Archive, 6 Apr. 2021,

<https://youtu.be/TMCO3IRJpyo?si=GjIKsnad9m1sE0lP>

(最終閲覧日 : 2024年12月16日)